



「地域調査研究」

記録とレポート 2013

—泉州地域の繊維産業とその課題—



JAPAN MADE



和歌山大学岸和田サテライト
和歌山大学経済学部

「地域調査研究」記録とレポート 2013

－泉州地域の繊維産業とその課題－

和歌山大学岸和田サテライト
和歌山大学経済学部

目 次

はしがき	3
「地域調査研究」4日間のスケジュール	6
フィールドワークの記録 ～泉州繊維産業の歴史と現在を学ぶ～	9
「地域調査研究」参加者レポート	35
特別講座レジュメ 「大阪繊維産業における現状・課題と方向性」	59

はしがき

本誌は2013年8月20日（火）から23日（金）にかけて実施した、和歌山大学経済学部開講「地域調査研究」の野外実習記録と成果レポートを編集したものである。「地域調査研究」は、経済学部の2年次向けの基本研究科目として2007年度より開講されている、本学経済学部にあっては数少ないフィールドワーク科目である。これまで、この科目は主として大西敏夫教授、足立基浩教授によって担当されてきたが、2012年度以降は藤田が担当している。担当者によって内容は若干異なるものの、各地で展開している産業や地域が抱える社会経済的課題について、実際にフィールドに赴き、現地での調査・観察を通じて把握し、机上の学習で得た知識と併せて解決策へとアプローチする能力を涵養することが本科目の主たる目的である。幸いなことに、経済学部には第一次産業、第二次産業、第三次産業を専門とする研究者が在籍しており、幅広い内容で科目が提供できる状況にある。加えて、現地にとっては不幸なことではあるが、課題解決学習のためのフィールドにも恵まれている。本学が立地する和歌山県は、仁坂県知事の言を借りれば「課題先進県」であり、多様な課題が山積している状態にある。また、本学の多くの学生の出身地である大阪府南部、泉州地域も多様な課題を抱えている地域である。様々な課題を抱える地域が周辺に展開していることは、学生教育においても格好の場であると同時に、本学にとっては解決を支援すべき諸問題が豊富にあるということといえよう。なお、泉州地域については、2003年に本学と岸和田市との間に連携協定が結ばれ、学外拠点として岸和田サテライトも設置されており、サテライト長も経済学部教員が務めている。その関係から、2011年度以降については岸和田サテライトの支援を受けつつ、岸和田市を中心とする泉州地域で本科目を開講してきた。

今年度の授業は、学部学生13名が受講し、担当教員（藤田）、外部講師および指導補助（松本コーディネーター）の3名で指導にあたった。とくに外部講師には本学経済学部OBで大阪産業経済リサーチセンターにおいて府下の産業振興に携わっておられる松下隆氏を迎え、長年実務に携わってこられた知見をもとにご指導賜った。また、地域課題の発見・理解・解決という趣旨、そして対象が泉州地域であるという点から、自らの居住地域である泉州地域の有する課題への理解を深めたいという岸和田サテライトの社会人受講生のべ10名も同行参加した。

今回の授業は「泉州地域の繊維産業」をメインテーマとした。泉州地域は隣接する河内地域とともに、近世期から綿業地帯として知られてきた。近世後期には、家内制手工業が成立し、泉州は織物を生産する機業地帯として大きく成長を遂げるようになった。近代に入ってから、綿布の生産とともに綿紡績が泉州そして京阪神の工業化の原動力となった。泉州にあつては、泉北郡南部で自作上層・中小地主が機業家への投資家として機能したことで、綿布生産に携わる織物工場が大きく増加した。中には久保惣のような先駆的機業家も登場するなど、中小機業家が活躍したのである。一方で、紡績業の場合は寺田一族のような地方財閥の活躍により、大規模工場が卓越した。このような地方財閥は、紡績業における資本蓄積を通じて、

金融業や鉄道会社の経営へと参画するなど、泉州のみならず広く関西地方の地域経済の主たる担い手となった。

さて、泉州で生産される繊維製品としては、綿織物が第一に挙げられる。しかし、一口に綿織物といっても、いわゆるテクスタイルとしての広幅・小幅織物以外に、パイル織りの別がある。パイル地の生産技術は明治時代後期に導入され、同時期にそれを利用したタオルの生産も泉佐野を中心に開始された。また、泉州といえば綿業といわれるが、一部では毛織物の生産も行われていた。泉大津がその中心地である。毛織物は真田織から発展したといわれるが、その発展型とされるのがアクリル毛布である。このような製品を生産する企業が多数集積したことで、綿業を中心とする繊維産業地域が泉州には形成されていたのである。

織布・紡績とも隆盛を極めたのは第二次世界大戦前のことである。第二次世界大戦中は、繊維産業全般が不要不急産業として規模の縮小を余儀なくされたが、戦後にいち早く復興を遂げた。しかし、その後起こる日米繊維摩擦などの影響で、繊維産業全体が斜陽産業へと転じることになる。泉州地域においてもそれを免れることはできず、1960年代以降急速にその規模を縮小させていくことになった。現在、泉州の産業構造は泉北臨海工業地域開発の影響もあり、重化学工業へと転換している。ゆえに、繊維産業が隆盛を極めた往時の面影をみることは困難となった。しかし、泉州の繊維産業の遺伝子は現在にも引き継がれている。今回訪問した企業をみてもわかるように、それぞれの企業が特徴的な技術・技能を有し、他社との競争に耐えうる戦略的な経営方針を採用している。その姿はあたかも現在の久保惣の様である。

企業活動以外の部分でも往時の面影は随所にみられる。市街地を見回すと特徴的な「鋸屋根」の工場建屋がみられるほか、工場の跡地が公共施設として転用されている例がみられる。さらには、経営者の邸宅など文化財的価値を有するものも残されており、それらの諸要素が特徴的な景観を形成している。このほかにも、かつての大規模紡績工場跡地が転用されていくプロセスが空中写真からもわかり、いかに本地域において綿業を中心とする繊維産業が重要な地位を占めていたかが理解できる。このような産業の存在はスポーツへも影響を及ぼし、東京オリンピック時に大松監督が率いた「東洋の魔女」の主力メンバーが在籍したのは日紡貝塚（現ユニチカ）であった。貝塚市はこれを記念して「バレーのまち」を標榜しているが、このような事例も間接的とはいいいながら繊維産業の遺構ともいえるだろう。このように、泉州地域では今なお社会、経済、文化の様々な部面にまで、繊維産業の影響を垣間みることができるのである。

今回の実習の反省点を挙げると、受講生が増加したこと、そしてこれまでのように1自治体内に訪問調査対象が収まらなかったことから、借り上げバスや公共交通機関による移動を伴うものとなった。その結果、スケジュールがタイトになり、十分な訪問時間が確保できなかった箇所もあった。くわえて、盆休み明けという日程と昨夏の酷暑という条件下で、過酷な授業日程になった。しかし、大きな事故もなく全日程を終了し得たことは、ご協力いただいた訪問先の皆様、そして参加者の高い意識のおかげであると確信している。なお、本講義を開講するにあたっては、岸和田市役所政策企画課の藤浪課長をはじめ岸和田市役所関係各

課の皆様、岸和田文化事業協会事務局長の真下氏、熊取町教育委員会の立石氏に様々な便宜を図っていただいた。また、植田毛織株式会社、大阪タオル工業組合、家次庄平タオル有限公司、大正紡績株式会社、ダイワタオル協同組合、木下織物工場、辰巳織布株式会社、井坂酒造場、南宗味噌、田尻歴史館、熊取交流センター煉瓦館、同館染工房の皆様には訪問実習に快くご協力いただいた。学生の実習費には、経済学部同窓会柑芦会からの助成金を活用させていただいた。末筆ながら記して深く感謝申し上げる次第である。

2014年7月
藤田和史

「地域調査研究」 4日間のスケジュール

8月20日(火)

9:40	自泉会館集合 (南海岸和田駅から徒歩 15 分、蛸地藏駅から 7 分)
10:00 ~ 10:10	授業ガイダンス (経済学部 藤田和史 准教授)
10:10 ~ 11:30	特別講座「泉州地域の繊維産業」(大阪産業経済リサーチセンター 松下 隆氏)
11:30 ~ 12:00	自泉会館見学《寺田家・岸和田紡績の倶楽部施設》 (自泉会館からマイクロバス乗車)
移 動	昼食はマイクロバス車内にて
13:00 ~ 14:30	植田毛織株式会社 (岸和田市)《ふかふかのマイヤー毛布を製造》
移 動	マイクロバス (40 分程度)
15:30 ~ 17:00	大阪タオル工業組合 (泉佐野市)《「泉州タオル」ブランドで販売促進》 (大阪タオル工業組合からマイクロバス乗車～南海泉佐野駅降車)

※昼食は移動中のバス車内。自泉会館近くのコンビニで購入あるいは事前に準備しておく。

8月21日(水)

9:30	南海尾崎駅集合 (尾崎駅から大正紡績まで徒歩 15 分)
10:00 ~ 12:00	大正紡績株式会社 (阪南市)《地域の中小企業と繊維産業をリード》 (大正紡績からマイクロバス乗車)
移 動	昼食はマイクロバス車内にて
13:00 ~ 14:30	ダイワタオル協同組合 (泉佐野市)《設備とノウハウで後晒をリード》
移 動	マイクロバス (30 分程度)
15:30 ~ 17:00	木下織物工場 (岸和田市)《シャトル織機で小幅織物を製造》 (木下織物からマイクロバス乗車～南海岸和田駅降車、解散)

※昼食は移動中のバス車内。大正紡績近くのコンビニで購入あるいは事前に準備しておく。

8月22日(木)

9:30	南海吉見ノ里駅集合（吉見ノ里駅から徒歩 10 分）
10:00～11:00	田尻歴史館（田尻町）《「綿の王」谷口房蔵氏の別邸》
11:00～12:00	昼食は田尻歴史館内カフェ・ベッラメンテにて
移 動	（鉄道）南海吉見ノ里駅～泉佐野駅、（路線バス）泉佐野駅～五門
14:00～16:00	熊取交流センター煉瓦館（熊取町）《中林綿布工場の跡地で藍染体験》

※煉瓦館で解散。最寄り駅はJR熊取駅（徒歩 15 分）。

8月23日(金)

9:30	南海岸和田駅（東側ロータリー前）集合、マイクロバス乗車
10:30～12:00	辰巳織布株式会社（岸和田市）《世界に発信する高密度織の薄物生地》
移 動	マイクロバス（20 分）
12:00～13:00	昼食はJAいずみの愛彩ランドのビュッフェ（予定）
移 動	マイクロバス（10 分）
13:30～15:00	井坂酒造場（岸和田市）《創業 190 年、地酒「三輪福」を試飲》
移 動	マイクロバス（15 分）
15:30～17:00	南宗味噌株式会社《厳選された国産材料で作る味噌づくりを体験》 （南宗味噌からマイクロバス乗車～南海岸和田駅降車）

フィールドワークの記録
～泉州繊維産業の歴史と現在を学ぶ～

第1日目 自泉会館（岸和田市）



初日はまず、自泉会館の会議室にてガイダンス。受講生は、経済学部生 12 名にサテライトの社会人受講生と職員も加わり、総勢 22 人の多所帯となりました。猛暑の中、4 日間にわたるフィールドワークのスタートです。



藤田和史先生から、訪問先とスケジュールの発表。「4 日間で最低 1 回は質問をすること。それも単位認定に関係します」との注意に苦笑いを浮かべる学生たち。



自泉会館は、岸和田紡績株式会社の創業者・寺田甚与茂を顕彰して昭和 7 年に建築された近代洋風建築です。岸和田文化事業協会事務局長の真下豊光氏が、自泉会館の由来や市民の文化活動による活用について説明してくれました。



その後、真下氏の詳しい解説付きで館内を見学。館は、関西近代建築の草分けとされる渡辺節の設計によるもので、近世スパニッシュ様式を基調に随所に新味が加えられています。1997 年に国の登録有形文化財（つまり、重要な国民的財産）になりました。



企業訪問に先立って、大阪府庁商工労働部・大阪産業経済リサーチセンター主任研究員の松下 隆氏（経済学部 OB）による特別講義「大阪繊維産業における現状・課題と方向性」を聞きました。

講義では、綿花栽培の歴史から、大阪の繊維産業の現状や課題、今後の方向性について、訪問する企業の具体例も紹介しながら、わかりやすく解説してもらいました。



これからの繊維産業にとって、ものづくりのストーリーをつくり付加価値をつけていくことが大切とお話になり、そんなときには若者の感性が重要になってくるだろうと感じました。

たくさんの企業を調査してきた経験を持つ松下氏から、企業訪問の心構えも教えてもらいました。机上の勉強では学べないことを現場ではしっかり見て気づくこと、従業員や職場の雰囲気を見逃さないこと、そのためにはしっかりと挨拶をすることが大事など。



第1日目 植田毛織株式会社（岸和田市）



マイクロバスで移動し、最初に訪問した会社は、岸和田市の山手にある植田毛織株式会社。

植田朋樹社長から、日本の毛布づくりの歴史や毛布の製造工程についてお話を聞きました。



泉州地域は、全国の毛布生産量の95%以上を占めています。輸入品が増えるなか、植田毛織では日本製にこだわり、品質の良い安全で安心な商品を提供する努力を続けてきました。



つづいて、工場に移動してマイヤー毛布の製造工程を見学。

カール・マイヤー機という編機で2枚の布の間をパイル糸で編みあげ、その間をカットして2枚に分離させるというマイヤー毛布の独特の製造方法は見るだけでも面白い。



編みあがった毛布生地は別の会社の工場へ送られて、そこでプリントや染色がされ、ふたたび植田毛織に戻ってきます。プリントされた毛布生地はぺたんこで、毛布と言うより絨毯のようです。このあと、蒸し、洗い（洗剤、柔軟剤）を何度も通し、最後に乾燥させます。



これを無数の針の付いた起毛機にかけて、撚った糸をさばいて元の繊維に戻すことで毛羽立てて風合いを出します。すると、同じものだったとは思えないくらいに、柔らかく、ふわふわした毛布に変化します。



植田毛織では、国内大手寝装問屋や商社にアクリルマイヤー毛布や綿毛布を販売するほか、ポンチョや「うたた寝くん」といった商品を独自に開発し、販売する努力もしています。

第1日目 大阪タオル工業組合・家次庄平タオル有限会社（泉佐野市）



次に訪れたのは、大阪タオル工業組合。タオル産地の企業を支える団体です。専務理事の樫井学氏に泉州タオルの歴史、現在の生産動向についてお話いただき、タオル製造を解説した映像も見せてもらいました。



大阪・泉州は、日本のタオル発祥の地です。国内で販売されているタオルはいまや80%が輸入物となり、国産はたったの20%ですが、そのうちの半分を泉州タオルが占めています。（残り半分は今治タオル）



泉州タオルの特徴は、「後晒（あとざらし）」といわれる製造方法で、泉州のきれいな水を利用した伝統の製法と職人の技が、心地よく機能性の高いタオルを生み出しているとのこと。



大阪タオル工業組合のある地場産業支援センターの近所で操業している家次庄平タオル有限会社へ移動し、実際のタオル製造の現場を見学させていただきました。工場内にはたくさんの織り上がった生成(きなり)のタオル生地が置かれていました。



工場を出て見上げると、そこには片流れの屋根が連続する「のこぎり屋根」が健在です。繊維製品は湿度管理が重要で、建物の北側を向けた傾斜面にガラス窓を入れて工場内に安定した光を取り込んでいたそうです。



産地として生き残るために、工業組合に加入する企業が力を合わせる努力が続けられてきました。近年、“環境にやさしい安全・安心なタオル作り”をモットーに、化学薬品の使用を極力控え、徹底した品質管理の下で作られる「泉州こだわりタオル」のブランド確立にも尽力しています。

第2日目 大正紡績株式会社（阪南市）



フィールドワーク2日目の午前は、大正紡績株式会社を訪れました。

“持続可能なファッションの実現”をコンセプトに、オーガニック素材にこだわり、環境にも人にも配慮したエシカル（倫理的）なものづくりを行っている泉州地域を代表する紡績会社です。



案内してくれたのは多胡勉製造部長。

糸の原料となる綿花やカシミアや羊などの獣毛が大きな袋に詰められて積み上げられている工場の入り口から、しだいに糸が出来上がっていくまでの工場内の工程をたどりました。



原料を、ときにはブレンドもして、引き揃えて束にしてスライバーというものを作り、このスライバーをさらに引き伸ばし撚りをかけて粗糸にしていきます。そして、精紡機で粗糸を引き伸ばして撚りかけることで、細くて丈夫な糸が出来上がっていきます。



工場見学の後、多胡部長と、この日も同行してくれた松下氏を囲んで、質疑応答。かつてと比べて発注数量が減った現在、どのように工場を稼働させているのか？ タオル工場でも目にした「風綿」の処理方法は？ など、繊維関連企業が共通して抱える課題や各社の対応が少しずつ見えてきました。



エンドユーザーまで視野に入れてアパレルやデザイナーも交えて糸作りを行っていること、地域とともにある企業を標榜して地域で栽培された綿の製品化にも取り組んでいることなどをお聞きしました。



作って売りっぱなしではなく、素材メーカーでありながらもエンドユーザーの安全性や快適性まで考えたものづくりをしている大正紡績。その独自の経営方針は、これからの中小企業のあるべき姿として注目が集まりつつあります。

第2日目 ダイワタオル協同組合（泉佐野市）



午後に訪問した1社目は、ダイワタオル協同組合。

泉州タオルの産地においても数少なくなった染色加工を担う代表的な企業です。



前日、家次庄平タオルの工場で見かけたような生成のタオルが工場入り口付近にたくさん積まれていました。泉州にある製織工場からこうしたタオル生地が運ばれてきて、ここダイワタオルで漂白や染色、特殊加工が施されます。



染色の前にタオル生地ついている糊（のり）を除去します。このとき、短時間で済む化学薬品の使用を避け、時間はかかるものの環境に配慮した酵素を使った糊の分解除去が行われています。



色鮮やかに染色されたタオルは水洗いを繰り返した後、乾燥させます。

その後、検品を終えたタオルは別の会社の工場へ送られ、そこで裁断やミシンでヘム縫いが行われます。このような産地における分業によってタオルが出来上がっていきます。



漂白、染色、洗浄には大量の水が必要です。ダイワタオルは工業用水と比べて安価な井戸水を利用できる立地上のメリットをもっています。

しかし、染色や洗浄に使用した汚水の処理には大規模な設備と絶え間ない水質管理が求められます。工場敷地内に汚水処理設備を持っていることが、ダイワタオルの強みです。



工場見学の後、北川晃三工場長を囲んで質疑応答。

そのなかで、北川氏からはこんなお話もありました。「安さだけを求めるのであれば、いずれ日本製のタオルはなくなってしまう。緩い排水規制の下で環境に負荷をかけて作られるタオルと、厳しい排水規制の下で環境に配慮して作られるタオルのどちらを評価するか。日々使うタオルにもこだわって欲しい」。

第2日目 木下織物工場（岸和田市）



午後に訪れた2社目は、木下織物工場。
泉州木綿の伝統を受け継ぎ、小巾織物生地を作っている織屋です。
代表の木下宗計氏が手にしているのは長年大切に用いてきた杼（ひ）（シャトル）。
現在では全国で数社、泉州では泉佐野にある1社でしか製造されていないそうです。



工場内には、約40台の織機がところ狭しと並んでいます。
機械が動き始めると、リズムカルな「ガチャン ガチャン」という大きな音が工場内に響き渡ります。



かつては泉南地域・岸和田の山手では、副業として製織をしていた農家が多かったそうです。少し前まで木下織物でも地域の農家の女性を雇っていたそうですが、従業員の高齢化とリーマンショック後の不景気を受けて、現在は木下氏一人で工場を切り盛りされています。



請負の仕事だけではなく、直接販売につながるよう独自の企画・デザインも手がけています。コンセプトは、オーガニック素材を使った人と環境に配慮した製品づくり。

写真は「包近の桃」で染めた浴衣。



織り方、糸の本数などに新しいアイデアを付加した生地。ストールなどに向けた独特の肌触り、風合いを生み出す工夫がされています。



2日目はいずれも泉州の繊維産業の伝統を継承しつつ、新たな製品開発、付加価値づくりに挑戦している会社でした。安価な輸入品が普及するなか、地域に踏みとどまり、地域の産業とともにあろうとする各社に共通しているのは、エンドユーザーに安心して使ってもらえる製品づくり、環境に配慮したものづくりです。次に問われてくるのは、消費者である私たちの製品やものづくりを見る目のようです。

第3日目 田尻歴史館（泉南郡田尻町）



フィールドワーク3日目は、電車や路線バスを乗り継いで、泉州の繊維産業に縁のある2つの施設を訪れました。

南海電鉄吉見ノ里に集合し、最初に向かったのは田尻歴史館。紡績業で成功した谷口房蔵氏が別邸として大正11年に迎賓館として建築した館です。



1階のメインダイニングをお借りしてミニ講義。館ガイドの赤井氏が、谷口房蔵氏の業績から建築や内装までを詳しく話してくれました。

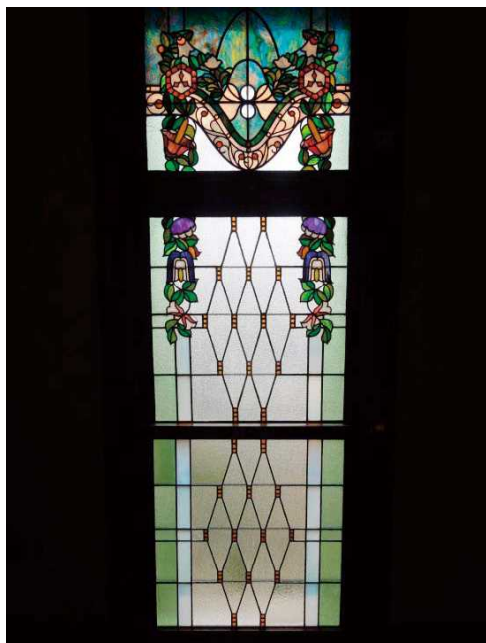
館内あちこちにあるステンドグラスは、草花をモチーフにしたもの。窓全面にはめ込まれていない小さ目のステンドグラスは、庭も見えるようにしたためではないかと言われています。歴史館には全国から建築の専門家が見学に訪れるとのこと。



庭には茶室が建てられています。広間、控えの間、鞘の間、水屋などを備えた本格的な構造です。



館は、取引先の海外からのお客様を迎えるためにも使われました。洗面所と浴室は宿泊室のあった2階にあります。現在の家屋では2階に水回りをつくることは一般的になっていますが、大正時代にもうすでにあったのですね。



この日の昼食は、建物内のカフェ・ベッラメンテでいただきました。3日目にもなると、学生たちも打ち解けてきて、みんな楽しそう。



谷口房蔵氏は、明治紡績の経営再建、大阪合同紡績株式会社や豊田式織機株式会社の創立のほか、港の浚渫（しゅんせつ）や教育支援、鉄道の導入、大阪倶楽部や綿業会館の創立などに尽力しました。また、房蔵氏の遺言により、ご子息の豊三郎氏が谷口財団を運営し、戦後日本の多くの研究を助成してきました。社会貢献することが大切であるという二宮尊徳の教えを守って、紡績業と財団運営の両輪の事業を成し遂げた谷口家の生き様も勉強になりました。

第3日目 熊取交流センター 煉瓦館（泉南郡熊取町）



続いて向かったのは、熊取交流センター煉瓦館。

昭和3年頃に建てられた煉瓦づくりの綿布工場を平成17年に保存活用した町民のための生涯学習施設です。自働織機500台以上を有し泉州の機業界をリードした工場の片鱗をうかがわせる広い敷地。経済産業省の近代化産業遺産に認定されています。



「のこぎり屋根」の名残が壁や建物に取り入れられています。所々に産業遺産を再活用したとても贅沢な設計です。

ゆったりとした廊下はギャラリーになっていて、町民の作品などが展示されています。



短いレンガと長いレンガを交互に段を違えて積み上げる手法はイギリス積み。このレンガは岸和田にあった大阪窯業で作られたものだそうです。かつてこの地域で暮らしてきた人たちの歴史をしっかりと未来に継承している。これらも是非味わってほしい。



熊取町職員・学芸員の立石則也氏から泉州木綿と煉瓦館についてお話を聞きました。

米を作るより綿を作る方が儲かった江戸時代。綿の需要が拡大していくなか、綿作、綿実油しぼり、綿打ち、綿燃、染色などの職業が出来上がりました。綿の栽培は、経済を活性化し、日本人の暮らしに重要な役割を果たしたのです。

その後、煉瓦館の一角にある染工房で藍染体験をさせていただきました。

染工房は、町民ボランティアの方々によって運営されています。今後「紺屋」という地名にちなんだブランド誕生が待たれています。



学生から、「分業化というのは製品になった時に自分がどこに関わったか、仕事の痕跡が残らないから自分がやったという達成感がないのではないか」と尋ねられた。

私は、「それぞれの過程でそれぞれの達成感があるはずで、形として残っていなくとも満足していると思う」としか伝えられなかった。



もう一言付け加えるならば、どこかが欠けると成り立たない分業は、人と人とのつながりをさらに強め増やしていけるはず。

様々な価値観があり、答えを与えてあげられないけれど、3日間の体験が着実にあなたを成長させたと思う。

第4日目 辰巳織布株式会社（岸和田市）



4日目の午前は、泉州繊維関連企業の締めくくりとして、辰巳織布株式会社を訪れました。

高密度織物を製造し、取引先は国内の商社から海外の有名アパレルブランドにまでおよぶ、岸和田を代表する世界的企業です。



経糸を織機にセットするためのマシン。数千本の糸をセットする作業は、かつては女工さんが何日間もかけて行っていたそうですが、今では機械化が進み、もっぱら男性技術者の仕事になっているとのこと。



2日目に訪れた木下織物の織機は小幅織物を織るシャトル（有杼）織機でしたが、こちらは広幅織物を織るエアジェット（圧縮空気の噴射力を利用して緯糸を入れる）織機。工場の1階には、こうした織機数十台がずらりと並んで稼動しています。



サイジング（のりつけ）後の経糸が巻かれたビームが関連会社から搬入され、織機にセットされるのを待っています。泉佐野のサイジング会社が閉鎖されかけたとき、辰巳織布が買い取り、工場を新設したそうです。初日の特別講義のなかで松下氏はこの事例を取り上げ、「辰巳織布によるサイジングの内製化は、産地におけるサイジング工場の公共財化の意味ももつ」と紹介されました。



工場見学の後、辰巳美績会長から、ご自身の経歴や会社設立から現在までの経緯、そして“今、ここでしか聞けない泉州綿織物業界の裏話”をお聞きしました。産地問屋から機屋になって半世紀、その間に繊維産業の盛衰を目の当りにしてきた会長のお話は、「日本経済論」や「戦後産業史」の貴重な教材そのものでした。



絶えざる努力によって新製品開発を続けて来た辰巳織布。織物には知的財産権がなく、しばらくすると新製品の技術は容易に模倣されてしまうのだそうです。それでもなお、その先に突き進んでいくために技術を磨き、経営戦略を練る。そうした攻めの経営姿勢を強く印象づけられました。

第4日目 井坂酒造場（岸和田市）

お昼からは、地域の「食」について体験学習すべく、JAいずみの「愛彩ランド」を訪れてビュッフェランチをいただき、午後は井坂酒造場を訪れました。



昭和30年代まで、泉州地域に20社あった酒蔵は、現在では井坂酒造場を含めて3社にまで減ってしまったそうです。文政元年（1818年）の創業以来、190年余の歴史を歩んできた泉州を代表する酒蔵です。地元岸和田では、銘柄の「三輪福」でよく知られています。



蔵元の井坂佳嗣氏から、日本酒に向けた山田錦と食べておいしいササニシキとの違いや、大手日本酒メーカーと地酒の酒蔵との生産の違いなどをレクチャーしてもらいました。以前よりも酒造りの工程は便利にはなったものの、それでもやはり、酒は「機械」ではなく「道具」で造るもの、というのが実感だそうです。



原料の山田錦は産地で精米されて酒蔵にやって来ます。その後、洗米し、蒸して、室（むろ）で麴づくりが行われます。



麴、蒸米、水、酵母でもって酒母を作り、これらを段階的に仕込んでみろみを発酵させ、適度なアルコール度になったら搾り、その後、火入れ（加熱殺菌）をして瓶詰めされます。



日本酒造りといえば、杜氏を思い浮かべます。蔵元が減っているように、高齢化や後継者不足で杜氏も少なくなっているようです。井坂酒造場では以前は兵庫の但馬杜氏を迎えていましたが、現在は杜氏の下で修行した息子さんが蔵元杜氏をされていて、但馬へ手伝いに行くこともあるそうです。蔵元と杜氏の関係は時代とともに変化してきているようです。

そもそも地酒とは氏神様に供える御神酒であり、地元で採れる米で作るものだったとのこと。今でこそ、地酒も輸送されて遠方まで届けられますが、かつてはそう広く出回るものではなかったそうです。なるほど、地酒は「地産地消」を考えるうえで、シンボリックなアイテムになりますね。



数週間前に打合せにうかがい、「実は今回の授業のメインは泉州繊維産業なのです」と伝えると、ご主人が目を輝かせて綿織物について詳しく話してくれました。というのも、なんとご主人が若い頃、酒蔵だけでなく綿織物もやっていたのだそうです。5代目として蔵を継がれたのを機に酒造に専念し、今があるのだとか。泉州地域で綿織物が兼業や副業を含めていかに盛んに行われていたのかというエピソードです。



残暑厳しい折、各企業・各施設の皆様にはご協力を賜りまして誠にありがとうございました。
詳しい説明、親切な見学案内にお時間を割いていただき感謝いたします。質疑応答にも丁寧にお答えいただき、学生、社会人受講生ともども有意義な勉強をさせていただくことができました。

地域の産業を存続させていくためにますます重要になっている関連企業の間での協同。ものを作るといふ仕事の現実を知ること。大量に流入する安価な輸入製品を前に、価値観の問い直しも含めて、消費者として冷静に思考してみることの大切さなど、多くのことを学ばせていただきました。

受講生の皆さんもお疲れさまでした。炎天下の4日間、工場内の蒸し暑さはけっこう過酷でしたね。でも、大半のものづくりの現場とはそうしたものであり、このようなものづくりが地域の産業や人々の暮らしを支えてきたということも理解できたのではないのでしょうか。

今年の「地域調査研究」のフィールドは泉南地域3市2町にまたがりました。基本はチャーターしたマイクロバスでの移動でしたが、日によっては電車や路線バス、そして徒歩での移動もありました。移動は直線距離で約50キロ、道のりで70～80キロといったところでしょうか。学生の皆さんは、これに加えて和歌山市内からの往復があったわけですから、本当にお疲れさまでした。

これから本格的に経済の勉強をしていく学生には、難しいこと、理解しきれなかったことも多かったかもしれません。とはいえ、経済学部生として、また近い将来に社会人となっていく皆さんにとって、学ぶべきエッセンスがぎっしりと詰まった4日間だったと思います。もしかすると、この授業を受講した動機は単位を取るためだけだったという人もいたかもしれませんが、今回のフィールドワークの経験を今後の学習、ゼミ活動、卒業論文、進路選択などの機会に少しでも活かしてもらえたらうれしいです。

ブログ「岸和田サテライトの毎日」(2013年8月27日～30日)を再構成しました。
1日目と3日目は、サテライト事務補佐員の梅田由美、2日目と4日目は、地域連携コーディネーターの松本俊哉が担当しました。

補1 織編館を訪ねて

8月20日（火）から23日（金）にかけて、経済学部授業「地域調査研究」が行われ、泉南地域にある繊維関連の企業や施設を訪問させていただきました。

この間、岸和田サテライトは「大学の地域拠点」の名に恥じぬよう、訪問先の選定や先方との調整を進めてきたのですが、実は、気にはなりつつも、チェックし忘れていた施設が1ヶ所ありました。



泉大津市にある「織編館」です。

後学のために見学に行ってきました。南海泉大津駅から徒歩数分のところにあるテクスピア大阪の2階にあります。織編館のウェブサイトによると、「『織り』と『編む』をテーマとした博物館で、繊維関連資料や民俗資料を収集・保管し、展示や調査研究を行っています」。

2階に上がると、まず目に飛び込んでくるのが、ロビーに鎮座するこの「ジャカード織機」。明治44（1911）年頃から大正末期まで、柄毛布を織るのに使われていた手織機。「三丁杼変換装置とジャカードにより、緯糸と経糸の操作で自由に柄を出すことができる」というシロモノです。織機の上の方にセットされたパンチカードのパターンによって、複雑な模様を織ることができたのだそうです。



展示室の中には、解説パネルとともにさまざまな繊維製品や織機が展示されています。順路前半は、毛布をメインに紹介しています。というのも、泉大津は「日本一の毛布のまち」なのです。明治18年、日本初の毛布がここ泉大津で作られました。現在、国内で使用されている毛布の多くは輸入物ですが、数少ない国内製品のほとんどは、ここ泉大津とその近隣地域で作られています。

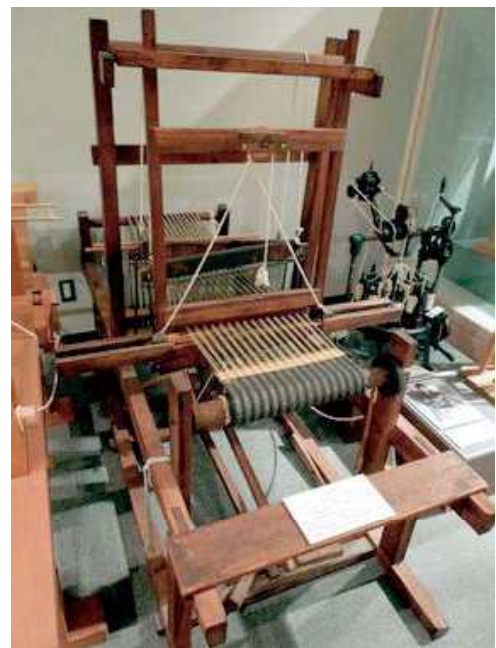


毛布の起毛工程に使用された「チーゼル」（という植物を乾燥させたもの）。トゲトゲで引っかいて毛羽立たせることで風合いを出します。岸和田にはチーゼルの栽培する畑があったそうです。

毛織物の原料となる羊毛、獣毛のサンプル。これらの毛で織られた生地サンプルを触って比べてみることができます。写真は手前から、カシミヤ、アルパカ、アンゴラヤギ、アンゴラウサギ、フタコブラクダ、そして羊。



順路後半では、さまざまな織機や編機が紹介されています。「真田織機」（復元）。真田紐（平たい織物のひも）は、明治中頃に機械化されるまではこうした木製の手織で織られていました。



「木製手機」。明治中期以降に泉大津市域で用いられた木綿織機。引き手を引くと杼が左右に移動するようになっており、手で杼を移動させるよりも製織時間が短縮できました。この織機によって木綿の生産性が向上したのだそうです。

館内の随所に、泉大津が毛布に代表される繊維のまちだったことが紹介されています。また、展示されている織機等は地元の個人や企業からの寄贈に支えられていることもうかがい知ることができます。なかには、手で触れて繊維製品の風合いを比べてみるができる展示もあります。展示スペースはコンパクトですが、「織り」と「編み」にかんする道具・機械や技術の変遷、地域産業の特徴と推移などを知ることができる地域の博物館です。

今回は常設展示を観覧しましたが、「ガイドスブック」によれば、開館以来収集してきた資料を中心とした企画展が随時開催されるようですし、手織の体験学習の実施などもあるようです。ですから、一見しただけではわかりませんが、博物館としてのポテンシャルはもっと高いのかもしれない。

欲を言えば、さらに広範な泉州一带の繊維関連の歴史や産業についても取り上げてもらえるとありがたいです。泉州地域は歴史的に形成されてきた日本随一の繊維関連産業の集積地です。かつての隆盛からは程遠い現況ですが、それでも地域の企業が様々な課題に挑戦し続けてきた結果として、今の地域産業があります。こうしたことを包括的に研究し、紹介・展示し、学習機会を提供してくれる施設であるといいなと思います。

市立の博物館だから他市の産業は取り上げないなんていう了見の狭さはないでしょうが、広範囲にわたって資料等を収集することは資金的には困難かもしれません。そうであれば、博物館ネットワークみたいなものが作れないでしょうか。例えば、木綿博物館、紡績歴史資料館、綿織物資料館、毛織博物館、タオル資料館、ニット博物館などがあって（新設しなくても、既存の施設の位置づけ方の問題）、ネットワークの構成単位として、それぞれの博物館が関連するテーマの活動を展開する。そうなれば、繊維に関心の高い人が泉州に点在する複数の博物館を数日で訪れることができ、ネットワークを活用して集中して観覧や調査が可能になります。

同時に、各館が相互に連携して補完しあい、展示品の巡回等を積極的に行ってはどうかでしょう。例えば、2、3年で展示が一巡するようになれば、ある館の地元の住民は最寄りの館へ通うことで、2、3年で泉州地域の繊維産業に関する歴史と現在について一通り学習できるようになります。来訪者が少なければ、博物館活動を活性化させていく新たな展開にも消極的になるでしょうが、多くの人が訪れるようになれば、新たな方向性の模索などより活発な活動にもつながるかもしれません。（松本）

ブログ「岸和田サテライトの毎日」（2013年8月24日）を再構成しました。

補2 泉南地域の文化遺産とまちづくり

大阪市内、京都や神戸には、明治・大正・昭和初期の洋館やレンガ建築がたくさん残っていて、リフォーム・リノベーションされて、まちづくりや観光資源としての活用、保存が進んでいます。実は、泉南地域だって負けてはいません。田尻歴史館や自泉会館のような文化遺産が健在です。もちろん地元の人たちには馴染みある施設でしょうが、意外と外の人たちには知られていないようです。



単に、知名度が高まって、多くの見物人が訪れるようになればいいと言いたいわけではありません。江戸時代には和泉木綿の産地として栄え、近代以降は国内有数の紡績業の集積地であった泉南地域。こうした郷土の歴史を学ぶうえで、これらの産業文化遺産はとても大きな価値を持っていると思うのです。しかし、それぞれが分散的に保存・利活用されていて、統合的・包括的には管理・運営されてはいないようです。かつての泉南地域は繊維関連企業の集積地という産業特性をもっていたし、それらの事業が地域社会に及ぼした影響は小さくなかったでしょうし、現在の地域産業の各所に名残をと



どめています。こうした全体像を振り返ることができる施設として、それぞれの産業文化遺産が相互補完的に活用されていないのであれば、残念な気がします。地域の産業文化の歴史を「点」としてではなく、「面」として学ぶことができるように、こうした施設がネットワーク化されていくといいなと思います。（「大阪ミュージアム構想」はコンテンツが大規模すぎて、いまひとつピンときません。もっと丁寧に細やかに構想したほうがいいと思います）

各施設、各産業遺産はその文化的価値ゆえに公共的性格をもっています。だから、地方自治体の所有となっているケースが多いでしょう。産業遺産は市民の共有財産でしょうから、自治体が所有することには意義があると思います。が、行政区分が災いして、それぞれの遺産を地域の特徴のなかに位置づけて理解したり、統合的に活用したりすることを妨げることになってはもったいない。広域ネットワークはこうした側面でも促進されるといいなと思います。



観光振興などの面では、泉南地域の自治体は単独では京都市や神戸市の集客力にはかなわないのは言わずもがなです。だったら、もっと効果的なスクラムを組んだらよいのに…。お金やビジネスの観点からだけではありません。郷土史の理解促進や地域活性化、まちづくりという観点からも、スクラムを組むことは有意義なことだと思うのです。この場合、泉南地域の産業遺産は泉南地域に住まう市民全体の共有財産だという考え方がベースになるのかもしれませんが。また機会を見つけて考えてみたいと思います。（松本）

ブログ「岸和田サテライトの毎日」（2013年8月1日）を再構成しました。